

「宿世とをかりけるを」攷

——河内本から見た『源氏物語』——

浅尾 広良

序

光源氏が明石から京に帰還の後、政界に復帰し、新たな歩みを始める巻が濔標巻である。濔標巻は、光源氏による桐壺院追善の法華八講に始まり、朱雀帝の退位と冷泉帝の元服と即位、承香殿女御腹皇子の立坊、光源氏の内大臣・元左大臣の太政大臣・頭中将の権中納言就任、夕霧の童殿上、二条東院の造営着手と語り続ける。そして「まことや、かの」の語り出しと共に、明石御方に女兒誕生が語られ、光源氏が宿曜の勘申を回想する場面へと展開する。そこで語られるのが、自分の半生を省みての「宿世とをかりけり」と回想する言辞である。

光源氏に与えられる三つ目の予言とされる宿曜の勘申に

端を發したこの「けり」を伴った（気づき）は、従来からさまざまに論じられてきた。しかし、その解釈は基本的に青表紙本を中心とした読み方である。一方、この場面を河内本で読んでみると、語られ方が微妙に違い、当然意味するとところも変わってくる。元々の本文がどうであったかは知るよしもないが、いくつかの本文を校合して作られた河内本は、校訂者の理解がより本文に反映していると見て良い。

本稿では、この場面における青表紙本と河内本との違いを確認しながら、それぞれがここをどのように理解していたのかを検証してみた。本文により多少の違いはあるが、便宜的に青表紙本については大島本を、河内本については尾州家本を使いながら以下論述を進めることとする。^①

一 問題の所在

問題となる箇所は、濔標卷の最初の方で、御代替わりが語られた後、それに伴った人々の動静を語った中で、明石御方に女兒が誕生したことが報告された直後の場面である。大島本によって掲載する。

宿曜に、「御子三人、帝、后からなす並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」と勤へ申たりし事、さしてかなふなめり。大方、上なき位にのほり、世をまつりごち給ふべき事、さばかりかしこかりしあまたのさふ人どもの聞こえ集めたるを、年ごろは世のわづらはしさにみなおほし消ちつるを、当代のかく位にかなひ給ぬることを、思のごとうれしとおほす。みづからも、もて離れ給へる筋は、更にあるまじき事とおほす。あまたの御子たちの中にすぐれてらうたきものにおほしたりしかど、たゞ人におほしをきてける御心を思ひ、**宿世とをかりけり**、内のかくておはしますを、あらはに人の知る事ならねど、相人の言むなしからず、と御心のうちにおほしけり。今行く末のあらましごとをおほすに、住吉の神の

しるべ、まことにかの人も世になべてならぬ宿世にて、ひが／＼しき親も及びなき心をつかふにやありけむ、さるにては、かしこき筋にもなるべき人の、あやしき世界にて生まれたらむは、いとをしうかたじけなくもあるべきかな、このほど過ぐして迎へてん、とおほして、東の院いそぎ造らすべきよしをもし仰せ給ふ。

(濔標②一〇〇〜一〇一頁)

女兒誕生を機に、昔占った宿曜の勘申を回想する。それによれば、子どもは三人しか生まれず、一人が帝、一人が后、もう一人は太政大臣で位を極めるといふ。このうち、冷泉が帝に即位したことを根拠として「さしてかなふなめり」と思う。そうなると、今回生まれた女兒は「后」になるということである。そこから自分を占ったさまざまな占いを思い出し、その文脈の中で「宿世とをかりけり」と心の中で思う。宿曜の中身は光源氏の子どもに關することでありながら、なぜ光源氏は自分の宿世に想いを馳せるのか。それは、子どもに關する「宿曜」が、自分に与えられた「相人ども」の言葉と密接に繋がっていると確信したからである。その結果として「(自分の)宿世は(帝位から)遠い」と考えたに他ならない。とすると、光源氏は何をど

う考え、このような（気づき）を得たのか。また、この場面面でこれを語ることにどのような意味があるのかが問題となる。

この言葉にいち早く注目したのは、藤井貞和である。藤井は、「相人の言むなしからず」というのは、「予言」が実現したという想念ではなかったかとし、桐壺卷のかけられた謎、かの「予言」の射程は、ここ濔標卷へねらいさだめていたのではないかと指摘した。^②しかし、通説では桐壺卷の「予言」の実現をここには見ず、藤裏葉卷の准太上天皇に登りつめることをもって実現と見る。藤井は「准太上天皇位なるものが、かの桐壺の巻の謎のような「予言」の意味するところのものであったと、物語そのものには一行も書かれていない」と主張し、帝位に即くことなく、しかも帝王の相をあらわすような「予言」の実現とはどのような内容であろうか。実の子を帝位に即けること、それによって、当帝の父となることであったと考えられるとし、藤裏葉卷の准太上天皇位は、予言の後半の「天下を輔くる方に見る」ことに対応するのだと言う。つまり、高麗人の相人の「予言」が、前半部と後半部とに遊離して、二段階の実現を見た、ということが結果から指摘できると述べる。^④

藤井は、桐壺卷の高麗人の観相を前半と後半とに分け、そのうち前半の実現をこの場面に見るといって斬新な読みを提示した。ここに予言の実現を見るなど、誰も考えたこともない着想だったが、この一言がその後かに注目を集めることになる。桐壺卷の高麗人の予言について、長年に渡って研究を積み重ねてきた森一郎が藤井貞和の読みを「精細に分析し真正面に論じて問題を浮彫り」にした「画期性と影響力の大きい論文」^⑤と賞賛したことで、藤井の提示した物語の理解は、その後急速に広まっていく。

明らかにこの見方を承けたと思われるのが、草苺禎である。草苺は、光源氏が濔標卷で「宿世とをかりけり」と述懐する以前において、一度も自らの宿世について語ることはなく、ここで俄に回想することの重要性に注目し、それまでは自らが帝位につくことを考えていたのだと説く。それは桐壺院の遺言によって強く信じ込まれていた。しかし、光源氏は「宿世とをかりけり」と自らの進むべき道を自覚するとともに、桐壺院との別れを果たす。光源氏は我が子冷泉帝を補佐するという自らの新しい宿世を実感したのだという。^⑥

高木和子は、この宿曜が冷泉帝即位後、明石姫君誕生の

時点て明らかにされることが肝要であるとする。この宿曜が過去になされたものとして回想的に紹介されるにせよ、やはり濔標卷の情況下に要請された予言であるとし、紫上に光源氏の子ができることを光源氏と読者は断念せざるを得ず、それゆえに明石姫君を紫上の養女にする展開が自然と導かれてくるのであるという。薄雲卷における冷泉帝の讓位の意思表示と光源氏の固辞、光源氏の齋宮女御への恋の挫折は、いずれも光源氏自身が予言に従って生きる意志を持つたかのような姿勢であり、その結果「御子三人」の予言の実現が事後的に追認され、結果的には予定調和的な展開となっていく。そして藤裏葉卷で准太上天皇となることで、第一から第三の予言の総体が一層明確に、光源氏の栄華の最終的な姿として実現されるのであると述べる。

もともと、濔標卷の宿曜は、桐壺卷の高麗人の観相と若紫卷の夢占いと並んで光源氏の人生を拓く三つの予言と位置づけられながら、前二つの予言と三つ目の宿曜とは、物語における働き方において性格が異なると指摘されてきた。⁽⁸⁾前二つが不吉な内容を伴いながら未来のことを語るのに対し、濔標卷のそれは全く分明かつ全的に栄華の予言で、さらに実現した段階で示されているということであ

る。⁽⁹⁾この宿曜が濔標卷の時点で語られることについては、光源氏が自分の人生を認識し、宿曜の予言に従って生きること、具体的には明石姫君に対する処遇などに表れるのだという。⁽¹⁰⁾また、宿曜の予言内容があまりに明瞭すぎることから、光源氏は物語の中に神の視点を獲得したとか、主人公をもてあそぶ推進力としての〈予言〉ではなくなり、それは古代物語の方法からの離陸と位置づけられてもいる。⁽¹¹⁾また、光源氏が自ら皇位に即くことを断念する一方、明石姫君が后になることを確信することで、明石御方もまた住吉の神の導きにより「后」の母たるべき「宿世」を負って自分と結ばれたことを認識する。これは、女の側からのもう一つの王権志向の物語が、光源氏自身の皇位喪失を埋めるべく結合されたことを意味するのだとする指摘もある。⁽¹²⁾藤井貞和が新たな読みを提示したことを契機として、濔標卷の読み方は大きく変わるようになった。それにしても、この場面で、自分の子に関する予言を回想しながら、急に自分に関する予言に転化することの唐突さには、相変わらず違和感が残る。藤井が言うような予言の実現を見たという〈気づき〉なのかどうかも含めて、この文脈をどのように理解したら良いのかについて考えてみたい。という

のも、青表紙本で読んだ場合には藤井の指摘する内容がある程度当てはまるものの、河内本では一部の本文が異なっており、そもそも別の理解に立っていると思われるからである。次節では、大島本と尾州家本を比較することから、それぞれの理解の有り様を探ってみたい。

二 大島本と尾州家本の文脈の解釈

宿曜の勘申の内容から始まり、「宿世とをかりけり」を経て、二条東院を急いで造らせるとする最後までを、①から⑤の五つに分解し、細かく異同を見ていきたい。前節では大島本での本文を掲載したので、ここでは尾州家本の本文を掲載する。

①すくえうに、「御子三人、后、帝ならびてかならずおはしますべし。なかのおとりは太政大臣にてくらゐをきはめ給ふべし」とかうかへ申たりしに、「なかのおとりのはらに女はいでものし給べし」とありし事を、さしてかなふなめり。②おほかた上なきくらゐにのほり給ひ、世をまつりごち給ふべきよしを、さばかりかしこきさう人などのあまた申あつめたりしを、としごろは世のわづらはしさにみなおもほしけちたる

を、たう代のかく御位にかなひ給ぬるを、おもひのごとうれしうおぼえ給。③御みづからは、もてはなれ給て、さらにあるまじき事とおもほす。④あまたの御子たちの御中にくぐれてらうたきものにはおもほしたりしかど、たゞ人におもほしをきてける御心をおぼすに、**宿世とをかりけるを**、うちのかくておはしますすば、あらはに人の知る事ならねど、さう人の事をむなしからず、と御心のうちにおもほしけり。⑤いまは行すゑのあらまし事をおもほすに、住吉の神のしるべ、まことにかの人もかく世になべてならぬ宿世にて、ひがくしきおやたちもよびなき心をつかふにぞありけむ、さるにてはかしこき筋にもなすべき人の、あやしき世界にむまれたらんが、いとしくもかたじけなくも、あるべきかな。この程すぎなばひんがしの院にむかへんとおもほして、いそぎつくるべき事もよをさせ給。
(濛標③(5ウ〜7オ) 16〜19頁)

問題となる「宿世とをかりけり」の部分は、「宿世とをかりけるを」と下に続いており、「けり」で言い切るのは、「御心のうちにおもほしけり」の部分のみである。これによつて当然意味は変わってくる。

では、以下に①から⑤に分解した箇所毎に比較検討してみたい。(大)は大島本、(尾)は尾州家本の本文である。尾州家本が大島本と比べて異なっている部分に傍線を付す。最初に①の部分以下の通りである。

(大) 宿曜に、「御子三人、帝后みまろからなす並びびてう生まれたまふべし。中の劣りおとは、太政大臣みかどにて位くらゐを極きはむべし」と勸かたがへ申まうたりし事、さしてかなふなめり。

(尾) すぐえうに、「御子三人、后、帝みかどならびてかならずおはしますべし。なかのおとりは太政大臣みかどにてくらゐをきはめ給たまふべし」とかうかへ申まうたりしに、「なかのおとりのはらに女むすめはいでものし給たまべし」とありし事を、さしてかなふなめり。

この箇所で大きく違うのは、宿曜として語られた言葉で「后、帝」が並びて必ずおはしますべし」とあつて、「后」が先に語られ、「生まれたまふべし」ではなく、「おはしますべし」とある。さらに最後に「中の劣りの腹に女はいでものし給べし」という言葉が占った内容としてついている。そもそもこの場面は、明石御方に子どもが生まれたことを契機として宿曜のことを思い出すのだが、大島本で読むと、「帝」である冷泉帝が中心で、冷泉が即位した

ことを契機として「さしてかなふなめり」と判断している。ただし、青表紙本や別本の中にも、いくつかの本が「中の劣りの腹に女はいでものし給べし」の本文を有し、河内本と同じ本文となっている。これが河内本の影響で付け加わったのか、もともとあつたのに大島本等が削除したのかは不明である。その冷泉帝に后が並列しているために、今回生まれた明石御方の女兒が后になるのだと確信する文脈なのである。

これに対して、尾州家本では、宿曜の内容は「后」に始まり、帝が即位したことだけでなく、后となるべき女兒が「劣り腹に生まれる」と占ったことまでをかなつた内容として語ることで、娘が生まれたことを発端としながら、それが劣り腹に生まれることで、なるほど宿曜の通りだと納得する文脈としてある。尾州家本の方が光源氏の思考の流れに沿っていると言える。しかも、尾州家本の方は、「帝」だけが中心ではなく、「后」と「帝」の両方に重点を置く。ただし、宿曜の勸申の言葉だけに注目すれば、「左右相称ともいふべき莊重な形式に則っており、桐壺卷のそれと相応する」として、「中の劣りの腹に女はいでものし給べし」の文言は冗漫で宿曜の勸申の言葉としては採りが

たいとする意見もある。⁽¹⁴⁾

続く②の部分は以下の通りである。

(大) 大方 上なき位にのぼり、世をまつりごち給ふべき事、さばかりかしこかりしあまたのさふ人ども(2)の聞こえ集めたるを、年ごろは世のわづらはしさにみなおぼし消ちつるを、当代のかく位にかなひ給ぬることとを、思のごとうれしとおほす。

(尾) おほかた、上なきくらゐにのぼり給ひ、世をまつりごち給ふべきよしを、さばかりかしこきさう人などのあまた申あつめたりしを、としごろは世のわづらはしさにみなおもほしけちたるを、たう代のかく御位にかなひ給ぬるを、おもひのごとうれしうおほえ給。

ここでは、大島本と尾州家本で大きな差はない。ただし、尾州家本の方が尊敬語がより細かく入り、「聞こえ集めたる」が「あまた申あつめたりし」と過去の助動詞「き」を用い、自分自身が多くの占いを聞いたことを示し、「おほし消つ」を「おもほしけちたる」として完了の意を入れ、誤解のない文章となっている。

ここで重要なのはむしろ内容で、光源氏が「上なき位」

に上り、「世をまつりごち給ふべき事」と述べた優秀な「あまたのさう人ども」の占い（予言）を、ここ数年來はずっと「思し消つ」、すなわち「強いて忘れていた（無視していた、気に掛けないようにしていた）」と語ることである。何故かと言えば、光源氏の境遇が、およそ「上なき位」に上ることや、「世をまつりごつ」ことからかけ離れていたからであろう。ここで言う「上なき位」は、桐壺巻の高麗人の観相に出てくる「帝王の上なき位」を指し、「あまたのさう人ども」とは、同じく桐壺巻の高麗の相人や宿曜など複数の観相を指すと思われる。問題は、明石御方に女兒が生まれたことをきつかけとして、子を占った宿曜の勘申を思い出すところまでの思考の繋がりは分かるが、そこから自分の観相へと転じ、「帝」の話に移って、冷泉が即位したことを思いがかなって嬉しいと思うという、その話の転換がなぜ起るのかである。

③の部分からは、再び自分の話に転換する。

(大) みづからも、もて離れ給へる筋は、更にあるまじき事とおほす。

(尾) 御みづからは、もてはなれ給て、さらにあるまじき事とおほす。

ここにについては、②の最後の部分と③との繋がりを大島本と尾州家本とで比較するとその違いが良く分かる。

(大) ②当代たんだいのかく位にかなひ給ぬることを、思のごとうれしとおぼす。

③みづからも、もて離はなれ給へる筋すぢは、更にあるまじき事とおぼす。

(尾) ②たう代のかく御位にかなひ給ぬるを、おもひのごとうれしうおほえ給。

③御みづからは、もてはなれ給て、さらにあるまじき事とおもほす。

藤井貞和は、大島本の③の「みづからも」とする本文について、いささか文意のとりかたに注意を要するとしながら、日本古典文学全集の頭注を根拠とし「故父院も源氏の即位を放念していたが、源氏もまた、のきもちとする。明快である」とし、「当帝のことにたいして、源氏「みづからも」という対比になつてるように読むことは、すなおな流れとしてあるのではなからうか」と言う。

一方の尾州家本では、「みづからも」ではなく「みづからは」となっており、こうなると当帝について「おもひのごとうれし」う思うことと、自らについて光源氏が「帝

位に即くことは）あるまじき事」と思うことが、対比的に区別される文体となる。「も」であつても対比的という点では同じだが、「は」の場合はもつとそれが強調され、全く別であるとする語り方となる。「当帝が即位されたのを光源氏は自らの思いがかなつて嬉しいと思ひ、自分はそうした帝位からは遠く離れ、まったくあり得ないことと思つている」となる。

そして、問題となる「宿世とをかりけり」を含む④の部分である。

(大) あまたの御子みこたちの中にすぐれてらうたきものにおぼしたりしかど、たゞ人におほしをきてける御心をおもひに、宿世とをかりけり、内うちのかくておはしますを、あらはに人の知る事ならねど、相人あいにんの言ことむなしからず、と御心ごこころのうちにおほしけり。

(尾) あまたの御子たちの御中にすぐれてらうたきものにはおもほしたりしかど、たゞ人におもほしをきてける御心をおほすに、宿世とをかりけるを、うちのかくておはしますをば、あらはに人の知る事ならねど、さう人の事をむなしからず、と御心のうちにおもほしけり。

大島本では、桐壺帝は沢山の皇子たちの中で、とりわけ自分を可愛がってくれたが、それでも親王にしなかった御心を思うと、「宿世とをかりけり」（自分の宿世は帝位とは無縁だったのだ）と光源氏が気づく。さらに冷泉帝がこのように即位したことを、その真相はあらわに人の知るところではないが、「相人の言むなしからず」（相人の予言は間違っではないなかったのだ）と光源氏は心の中で思うのであったと、光源氏の心内での二つの〈気づき〉を、最後に語り手が追認する形で語る。ここには光源氏の二段階での〈気づき〉がある。これと同じ本文を有するのが、青表紙本系諸本と陽明文庫本・阿里莫本・東大本・鶴見大学本である。

一方、尾州家本では、桐壺帝が沢山の皇子たちの中で、とりわけ自分を可愛がってくれたが、それでも親王にしなかった御心を光源氏がお考えになると、「宿世とをかりけるを」（自分の宿世は帝位とは無縁だったのであり）、冷泉帝がこのように即位したことを、その真相はあらわに人の知るところではないが、「相人の事をむなしからず」（相人の予言を間違いはなかった）と光源氏は心の中で思うのであったと、光源氏の心内を一貫して語り手の視点から語

るのであり、後半はともかく、前半の「けり」は〈気づき〉ではない。この尾州家本と同じ本文を有するのが、河内本系諸本と麦生本である。

以上のように、ここには大島本のような形と尾州家本のような形の二つの立場が存在することが判る。しかも、このあたりをよく読むと、「けり」を用いているのはこの二箇所のみで、大島本では両方とも〈気づき〉の意味だが、尾州家本では少なくとも前半は〈気づき〉ではない。とすると、尾州家本の前半の「けり」をどのように解釈すべきかが新たな問題として浮上する。

助動詞「けり」の意味については、さまざまな見解がある中で、ここを解釈するにあたっては、竹岡正夫や藤井貞和の見解が参考となるのではないだろうか。竹岡正夫は助動詞について、次のように述べる。

私は、助動詞を言語主体（話し手・作者のこと）の「認識・判断、あるいは思考のしかた」の種別を表す単語と考える。¹⁶⁾

さらに、「けり」については、

「けり」は、空間的にも、時間的にも、物語中の現場からは別世界での事象を、言語主体が「あなたなる」

世界における事象として認識していることを表す語である。¹⁷⁾

すなわち、登場人物や語り手の語る内容の時間的・空間的な遠近感を語る言葉として「けり」を位置づける。藤井貞和は、竹岡の説を承けながらも「けり」には時間の流れ、経過を表す機能があるとし、

私は、空間性を時間のうちに含ませて、〈時間的なあなたからやってくる事象〉であると、統一することができないかと考える。物語文学の大枠の時制は非過去つまり現在であつて、刻々と、現在なら現在の時間が流れている。そこへ〈あなたなる時間が這入りこむ〉と考えればよいのではないか。¹⁸⁾

とする。ここは、まさにこれらによつて説明できる箇所ではないか。

この「けり」の用法は、例えば次のような例である。

一の御子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲の君と世にもてかしづききこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をばわたくし物に思ほしかしづき給ふこと限りなし。(桐壺①五頁)

光源氏の誕生の場面で、光源氏を中心として語っている中に「一の御子」のことが入り込むと「けり」で語られる。物語の現在において「一の御子」は〈あなたなる事象〉として示されているのである。

空間と時間の遠近感を考慮しながら、④の部分再度尾州家本で読んでみると、桐壺帝が沢山の皇子たちの中で、とりわけ自分を可愛がってくれたが、それでも親王にしなかつた御心を光源氏がお考えになると、それは自分を帝位から無縁な者とする帝の処置があつたためだと遠い昔のことを回想し、その帝の処置の延長として、冷泉帝が即位したことを、その真相はあらわに人の知るところではないが、自分に与えられた予言の実現だったのだと、今初めて了解したという文脈となる。尾州家本は、この文脈が娘の姫君と息子冷泉帝のことが話の中心としてあり、自分の予言と繋がりながら、自分のことを時間的にも空間的にも遠いこと(遠景)として位置づけながら本文を作っていることが判明する。

最後に⑤の場面について見ると、

(大)今行く末のあらましごとをおぼすに、住吉の神のしるべ、まごにかの人も世になべてならぬ宿世にて、

ひがくしき親も及びなき心をつかふにやありけむ、さるにては、かしこき筋にもなるべき人の、あやしき世界にて生まれたるむは、いとをしうかたじけなくもあるべきかな、このほど過ぐして迎へてん、おぼして、東の院いそぎ造らすべきよしもよをし仰せ給ふ。

(尾) いまは行すゑのあらまし事をおもほすに、住吉の神のしるべ、まことにかの人もかく世になべてならぬ宿世にて、ひがくしきおやたちもよびなき心をつかふにぞありけむ、さるにてはかしこき筋にもなすべき人の、あやしき世界に生まれたるんが、いとおしくもかたじけなくも、あるべきかな。この程すぎなばひんがしの院にむかへんとおもほして、いそぎつくるべき事もよをさせ給。

この場面は、言葉が少し違っているものの内容はほぼ同じで、今までの気づきを承け、これからのこととして、自分と明石御方との因縁の深さに想いを馳せ、后になる予定の姫君が明石などという「あやしき世界」に生まれたことを困ったことだと認識し、少しでも早く二条東院に引き取りたいと考えるというのである。

以上から、大島本と尾州家本では、思考の流れ方と前景化される事柄が違うことが判る。大島本では、自分が帝位とは無縁であるというところと、冷泉帝即位を自分の予言と結びつけて相人の言葉が間違っていないかったという（気づき）に焦点化する本文であり、その意味では、子どもの話から始まりながら、自分の宿世を強調することで話が進められ、また娘の将来のことを考えて二条東院を急ぎ造らせるようにと、意識があちこち揺れる本文と言える。

それに対して、尾州家本は、后が劣り腹に生まれるという宿曜を思い出し、宿曜から昔のさまざまな予言の話となり、冷泉の即位が自分の予言と繋がっていると了解する。途中で挿入される自分の予言はあくまで時間的・空間的な遠景としてあり、桐壺巻の予言が冷泉帝即位、后となる予定の娘の誕生と繋がっていたのだというように、自らの予言の延長に今があるという認識で、思考の流れは一貫している。

尾州家本など河内本は校合本文であるから、校訂者である源光行・親行らの手が加わっていることは間違いない。とりわけ、この場面というと、尾州家本の方がより光源氏の思考の流れに沿っていると言える。むしろ、大島本の方

は、思考がずれながら「自分の宿世は帝位から遠かったのだ」というところに過剰に焦点化してしまった本文だと言える。そのために、藤井貞和のようにここで予言の前半が実現したのだということに意識が向かってしまうのである。

三 宿曜の勘申の位置づけ

古注釈書を見ると、この場面について古注釈書の筆者たちは、我々とは違うところに注目していたことも判る。底本とするのが河内本か青表紙本かの問題もあるが、「宿世とをかりけり」もしくは「宿世とをかりけるを」に注目する注釈書はなく、もっぱらこの宿曜の勘申がいつ行われたのかに関心が集まっている。漂標巻の「宿曜に御子三人」以下の箇所について注に注目してみると、

○『尋流抄』漂標

すくよう宿曜也 源氏夢を見給テ宿曜の博士問給へは御子三人有へし一人は御門に成給へし一人は后一人は太政大臣の位なるへしと合申 后大臣事はさもこそあらめ御門事は有ましき事なるに冷泉院の御事なるへし¹⁹

○『弄花抄』漂標

若紫に宿曜師の勘事也²⁰

○『細流抄』漂標

若紫にありし也²¹

○『岷江入楚』十四 漂標

私此事若紫巻に藤壺女御源の密通ありて懐妊の時の事をいへるに中将君もおとろしうさまことなる夢をみ給てあはする物をめしてとはせ給へはをよひなうおほしもかけぬすちの事をあはせたり その中にたかじめありてつゝ、しませ給へき事なむ待るといふに——此詞の下に箋の義にはく此事身をつくしの巻にみえたりと註せられたり 此義尤可信之 但前の若紫の夢の兆は源氏一世の事也 此御子のかすはかりの事にはあらずと心得へし 其中に此御子の事もこまれる也 又此末の詞にもあまたのさうにとあり 高麗人の相し奉れる事も桐壺巻にあり 宿曜師にかきるへからす 又前の夢をあはせたる内にすくようしも有へき也と心うへし²²

○『源氏物語湖月抄』漂標

(師) 此事若紫に、藤と光密通の後懐妊の事ありしに、中将もおどろおどろしくことなる夢を見給ひて、あは

するものをめして、とひ給ひしに、およびなくおぼし
もかけぬすじの事を合せし事あり。是冷泉院の源の子
なる事を顕せり。その所に細流の御説に、末巻に見え
たりとあそばせり、ここの所をいへり。抄にも此説あ
り。【愚案】若紫には、夢をあはする者とありて宿曜
の沙汰なし。桐壺の巻に、宿曜のかしこぎが源の事を
うらなひし事あり。それも御子の事にはあらず、只前
ありし事ならんにみるべきにや。若紫に夢を合せし
者、即宿曜師なりしなるべし。

『花鳥余情』にこそ記述はないが、一条兼良の教えを受
けた『尋流抄』からこの宿曜の勘申が行われたのは、若紫
巻の光源氏と藤壺の密通の後、光源氏が「おどろ／＼しう
さまことなる夢」を見て、それを占った時だと注し、その
後の注釈書もこの考えを継承している。若紫巻の夢占いの
場面を大島本で記すと以下の通りである。

中将の君もおどろ／＼しうさまことなる夢を見給
て、合はする者を召して問はせ給へば、をよびなうお
ぼしもかけぬ筋のことを合はせけり。「その中にたが
いめありてつゝしませ給ふべきことなむ侍る」と言ふ
に、わづらはしくおぼえて、「みづからの夢にはあら

ず、人の御事を語るなり。この夢合ふまで又人にまね
ぶな」との給て、心のうちにはいかなる事ならむと
おぼしわたるに、この女宮の御事聞き給ひて、もしさ
るやうもやとおぼしあはせたまふに、いとゞしくいみ
じき事の葉尽くしきこえ給へど、命婦も思ふに、いと
むくつけうわづらはしさまさりて、さらにたばかり
き方なし。はかなき一くだりの御返のたまさかなり
しも絶えはてにたり。

(若紫①一七八頁)

これで判るように、若紫巻の夢を占った者は、「合はす
る者」とだけあり、特に宿曜師かどうかは不明である。一
方、桐壺巻の光源氏を占った場面には「すくようのかしこ
き道の人」(桐壺①二二頁)とあり、こちらは明らかに宿
曜師と判る。ただし、この宿曜師の占った内容は「同じさ
まに申せば」(桐壺①二二頁)とあることからして、高麗
人の相人の言葉と同様の内容であり、「御子三人」の内容
ではない。

結局のところ、占われたのがいつであったのかは判らな
いが、若紫巻であるとする、「をよびなうおぼしもかけ
ぬ筋」(光源氏にとって及びもつかず想像もつかないこと)
というのは、文脈から言つて、「あなたの子が帝になりま

す」というようなことであり、だからこそ、藤壺宮が懐妊したことを聞いて、「もしさるやうもや」（もしかするとあの夢はこういうことだったのか）と考えたのである。とすると、この夢合わせは光源氏の「子」を占った内容であり、「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし」という中の、帝と后が子として生まれるという内容と軌を一にする。加えて、その実現のためには、「つ、しませ給ふべきことなむ侍る」（謹慎あそばすべきことがある）と言って須磨行きを暗示しながら、実はそれが「后」誕生のきっかけになっていくという、光源氏が后と帝とを子として設ける道筋を示した夢であったと読むことが可能となる。『尋流抄』・『弄花抄』・『細流抄』が若紫巻の夢解きの場面に宿曜の勘申があったとし、『岷江入楚』にも「前の夢をあはせたる内にすくようしも有べき也と心うべし」とあり、『源氏物語湖月抄』の愚案にも「若紫に夢を合せし者、即宿曜師なりしなるべし」と述べるのは、積極的にそう読もうとする立場であることが判る。夢解きが何の占いによってなされたのかは不明だが、古注釈書の筆者たちは、これを宿曜と理解していたのである。とすると、我々近代以降の読者は、光源氏の人生は桐壺巻の高麗人の観相

と若紫巻の夢解き、滯標巻の宿曜の勘申の「三つの予言」によって切り拓かれていくと読んでいるが、古注釈では桐壺巻と若紫巻の二つと読んでいたことになる。

そう考えると、この場面の位置づけは大きく変わってくる。若紫巻の夢解きが滯標巻の宿曜の勘申の内容であったとすると、光源氏の夢を占ったはずのものが光源氏の子、それも帝と后と太政大臣が生まれるという内容で、藤壺の懐妊のことを耳にして帝が生まれることを予感したことになる。須磨・明石を経て、京に復権を果たしてから、明石御方の元に女兒が誕生したことで、「帝と后が必ず並んで生まれる」「劣り腹に女が生まれる」という宿曜を思い出し、あの言葉はなるほどこのことだったのかと実感する文脈なのだろう。しかも、複数の相人が「上なき位」に上り「世をまつりごつ」と占ったが、自分の人生はおよそそうしたこととは無縁の辛いことばかりでずっと放念していたが、これは自分が即位することではなく冷泉が即位することだったのだと初めて気づく。相人の言ったことは嘘ではなかったのだと納得するのである。さらに、后となる姫君が生まれたのには、住吉の神の導きがあり、明石御方とも並々ならぬ宿縁があつてのことで、このまま辺鄙な田舎に

置いておくわけにはいかず、二条東院に迎えることにしようというのである。すなわち、思考の流れは、常に帝と后を中心としてあり、桐壺巻で自分に与えられた数々の予言は若紫巻で与えられた夢解きと繋がっていたのだ。さらに、その実現のためには「たがいめ」があり、須磨・明石に行かねばならなかった。すべては帝と后の誕生のためであったのだ、と桐壺巻の相人の予言と若紫の夢解き（宿曜）とが、すべて一連の内容として繋がっていたことを、冷泉の即位と后になるべき女兒の誕生によって了解したことになる。そうなると、予言は三つだったのではなく、桐壺巻と若紫巻の二つで、しかも、二つは繋がっていて実質は一つであったことに、濡標巻で初めて気づいて回想したということになる。

結

濡標巻の宿曜の勘申とその後の回想の場面については、理解の仕方として大きく二つの立場がある。宿曜の勘申が「后、帝」と始まり、「中の劣りの腹に女はいでものし給べし」の本文があるもの（河内本系諸本と、青表紙本と別本の一部）と、ないもの（大島本をはじめとした青表紙本と

別本の一部）とである。あるものでは「帝の即位」と「劣り腹に女兒誕生」の二つの要素をもって宿曜の予言がかなったと考えるのに対して、ない本文では「帝の即位」のみが根拠となる。女兒が誕生したことを端緒に宿曜を回想するという文脈の中では、これのある河内本の方がより自然な繋がりとなる。さらにこれに続く回想の場面では、自分の半生を省みて「宿世とをかりけり」と言い切る青表紙本系諸本と、「宿世とをかりけるを」として下に続ける河内本系諸本の違いがある。青表紙本で読むと、自分は帝位とは無縁だったのだという〈気づき〉と冷泉の即位をもって相人の予言は間違っていないかなかったのだという二段階の〈気づき〉が前面に出て、話の内容は「帝」と「自分」と「后」との間で揺れ動く。それに対して、河内本では、「けり」を使って時間的・空間的な遠景として自分の予言を位置づけ、それとの繋がりで今の「帝」と将来の「后」の話がある。藤井貞和によって、この場面は桐壺巻の高麗人の観相の実現と見る見方が提示され、一定の評価を得たが、それは青表紙本で読んだ場合にはある程度首肯できるものの、河内本で読んだ場合では必ずしもそうとは言えない。河内本では自分の話はいくまで遠景でしかない。これによ

り、随分と印象は変わる。さらに古注釈書は、若紫巻の夢解きの際の占いとして濡標巻の宿曜の勘申があつたと理解して、夢占いと宿曜を一緒のものと考えている。そう考えると、濡標巻のこの場面は、光源氏が桐壺巻の高麗人の観相の実現を見たというより、桐壺巻の高麗人の観相と宿曜の勘申が一つのこととして繋がっていたのだと気づく場面と理解した方が良いのではないか。

これによつて、光源氏は自分の使命を認識し、予言に従つて生きる意志をもつに至る。それは明石姫君を后とするために乳母の派遣や紫上の養女として迎えるためのさまざまの準備をすることであり、冷泉には斎宮女御を入内させ、聖代を演出して帝を支えることであり、夕霧には太政大臣を遠く見据えて、それに相応しい教育を施すことである。

ほんの少しの言葉の違いが、物語の読み方として大きく変わってくる例として、この濡標巻の宿曜の勘申とその回想の場面を指摘できるのである。

注

(1) 大島本については岩波書店刊新日本古典文学大系『源氏

物語』を用い、巻名、巻数、頁数を記した。尾州家本については岡島偉久子編『尾州家河内本源氏物語』（八木書店）を適宜翻刻して用い、巻名、巻数、丁数、頁数を記した。なお、本文中の傍線や傍点、および太字は全て浅尾。

(2) 藤井貞和「宿世遠かりけり考」（『源氏物語の表現と構造』所収 笠間書院 昭和54（一九七九）年）初出、後に『源氏物語入門』（講談社 平成8（一九九六）年）に収載

(3) 藤井貞和注（2）に同じ

(4) 藤井貞和注（2）に同じ

(5) 森一郎「解説」（『日本文学研究大成 源氏物語Ⅰ』所収 国書刊行会 昭和63（一九八八）年）、藤井貞和著「宿世遠かりけり」考」（『源氏物語と紫式部——研究の軌跡 研究史篇』所収 角川学芸出版 平成20（二〇〇八）年）

(6) 草苺禎「源氏物語『濡標』巻における「宿世遠かりけり」の意味するもの」（『立教大学日本文学』第67号 平成3（一九九二）年12月）

(7) 高木和子「三つの予言——変容する構造」（『源氏物語再考——長編化の方法と物語の深化』所収 岩波書店 平成29（二〇一七）年）

(8) 伊藤博「濡標」（『源氏物語講座』第3巻 有精堂出版 昭和46（一九七二）年）、篠原昭二「宿曜の予言をめぐって」（『むらさき』第12輯 紫式部学会 昭和49（一九七四）年6月）

(9) 篠原昭二注（8）に同じ

- (10) 篠原昭二注(8)に同じ
- (11) 藤井貞和「澗標」(『國文學——解釈と教材の研究——』昭和49(一九七四)年9月)
- (12) 高橋亨「光源氏体制の建設」(『講座源氏物語の世界』第4集 有斐閣 昭和55(一九八〇)年)
- (13) 青表紙本諸本の中でこの言葉があるのは、池田本・静嘉堂文庫本・三条西家本(日本大学蔵)・伝藤原家隆筆静嘉堂文庫蔵本・前田本で、別本では麦生本・鶴見大学本(「いでものしたまふべし」が「むまれ給べし」となっている)・阿里莫本・東大本にある。河内本諸本にはすべてある。単純に数の問題から言えば、ない本文の方が少ない。
- (14) 伊藤博注(8)に同じ
- (15) 藤井貞和注(2)に同じ
- (16) 竹岡正夫「けり」と「き」の意味・用法」(『月刊文法』第二巻第七号 昭和45(一九七〇年)年5月)
- (17) 竹岡正夫注(16)に同じ
- (18) 藤井貞和「伝来の助動辞「けり」——時間の経過」(『文法的詩学』所収 笠間書院 平成24(二〇一二)年)
- (19) 『尋流抄』本文の引用は、井爪康之編『尋流抄』源氏物語古注釈書(笠間書院)による。
- (20) 『弄花抄』本文の引用は、伊井春樹編『弄花抄』源氏物語古注釈書8(桜楓社)による。
- (21) 『細流抄』本文の引用は、伊井春樹編『内閣文庫本 細流抄』源氏物語古注釈書7(桜楓社)による。
- (22) 『岷江入楚』本文の引用は、中野幸一編『岷江入楚』源氏物語古注釈叢刊7(武蔵野書院)による。
- (23) 『源氏物語湖月抄』本文の引用は、有川武彦校訂『源氏物語湖月抄』(講談社学術文庫)による。
- (本学学長)